



まいど！ざいむ局です！ ～ 起業家編 ～

関西元気企業

～ 地域密着のラジオ局を目指して ～

地域のために地域の情報を流すラジオ局、株式会社エフエムマザーシップ。放送内容も近くのお店のセール情報から防災講座まで実に様々。

社長1人でラジオのパーソナリティからプロデューサー、システム機械操作、営業、技術、全てをこなします。

普通の主婦からFMラジオ局開設を成し遂げた坂口社長に、お話を伺いました。

企業情報

名称 株式会社エフエムマザーシップ
所在地 和歌山県有田郡湯浅町湯浅 2026-5
設立 平成13年9月 代表者 坂口 緑
資本金 3,000万円
HP <http://www.fm889.net>

●ラジオ局を起業しようと思ったきっかけは。

コミュニティラジオ局を作ろうと思ったきっかけは、阪神淡路大震災です。

当時の私は長年勤めていた会計士事務所を退職して、普通に主婦をしながら、税理士の資格を目指し、大阪にある専門学校に通っていました。

震災後、神戸在住の知人から1本のテープが送られてきました。

そのテープには、開局間もない神戸のコミュニティFM局のラジオ放送が録音されていました。

震災から1～2ヶ月もたつと、一般の放送局では、普通の番組を再開しているというのに、この放送局では「父、ここに眠る」、「母は体育館に避難」、「配水車は市役所前に来ている」、「このエリアに近づくと危険」などの安否情報やライフラインの災害関連情報をいつまでも伝えていました。

私は、このコミュニティFM放送局のテープを聞いてとても感動しました。そして災害時の情報の重要性を再認識するとともに、もし、この和歌山県有田地域で地震が起きたらどうなるのだろうか、と考えただけで恐ろしくなりました。有田地域は情報過疎地域で、AMラジオ局も届かないところ。南海・東南海地震が発生して津波に襲われてもしたら、この地域はどうになってしまうのか。「この地域を「情報」で守りたい」こんな気持ちが湧き上がってきました。ちょうどその頃、新聞で「銀座のOL本音トーク」というラジオ番組の記事が目に入りました。そこには、地域の住民が誰でも出演できる、身近なラジオ局のことが紹介されており、「これだ！」と感じたのです。災害時には安否情報や津波情報などの災害関連情報を、平時には地元の高中生やおじいちゃん、おばあちゃんなどの地域の人が地域の言葉で話かける、そういう地域コミュニティFM局を作ろう！と起業を決意しました。



【 代表取締役社長 坂口 緑氏 】

●起業されるにあたって苦労されたことは何ですか。

普通の主婦がラジオ局を開局しようとするのですから、並大抵のことではありませんでした。

認可をもらうために、国の機関に足しげく通いましたが、担当者からは「地元の役場が資本参加するのなら認可しましょう」と言われ、地元の役場に行くと「認可があれば、協力しましょう」と突き放され、いわゆる板挟みの状態になり、にっちもさっちも行かない状況に陥ってしまいました。



【 FMマザーシップ放送局 】

この時は既に応援してくれている友人らと「FMマザーシップ準備委員会」も立ち上げており、それなりにお金もつぎ込んでいましたので、周囲から「どうするんや」と責め立てられ、夜逃げか自殺を考えた時もありました。

結局、行政を当てにしているは埒が明かないということで、「全部自力でやるんだ」と強く決意し、全額民間出資の道を選ぶことにしたのです。

これが新たな苦労の始まりでした。まだ認可も下りない中で、地域の人に「事業参加への協力書」への署名をお願いに回るものですから、詐欺師呼ばわりされたこともありましたが、それでも挫けずに、ありとあらゆる先に頭を下げて回りました。「またお前か、何しに来たんや」と罵倒されたこともありますが、「自分の夢の実現に向けて1歩前に進むんやったら」と、ぐっとこらえました。ハンコをもらうのに、同じところを30回訪問したこともあります。ようやく198人から協力書への署名を得ることができ、これが認可取得の弾みとなりました。すでに起業を決意してから4年近くたっていましたが、粘り強く続けてこられたのは、「この地域を情報で守りたい」という強い想いだったと思います。

●なぜ、一人社員なのですか。

私はラジオ放送に関しては素人だったので、当初はプロの局長を招聘し、7人のスタッフで運営を行っていました。ラジオ放送の経験のある技術者やアナウンサーなどのプロのスタッフに大阪から来てもらっていました。

2年ほどたった時にふと、自分の中に「これでいいのだろうか」、「私のやっていることは、一般のラジオ局と何ら変わらないのではないのだろうか」という疑念が生まれました。

しかも、いざ災害が発生した時に、別の地域から来た人が地元の地名や近隣の施設などを的確に放送できるのだろうかということも感じていました。それからは、退社の補充をせず、辞めていく人たちの担当部門の技術を一つ一つ勉強して身に付けていきました。結果、今はパーソナリティー、プロデューサー、ディレクター、CMキャッチコピー制作、番組制作、システム機械操作、メンテ、営業、社長業等々、全て一人でこなしています。

今では、地元の警察署と連携をし、災害時に私が動けない場合でも警察の方がラジオ局に入り、緊急放送をしてもらえるように、防災訓練も行っています。

●一人では大変だと思いますが、どなたかに協力をしてもらったことはありますか。

営業で大きな仕事をとったものの、現地取材を行うための必要な機材の調達ができなくて困っていた時に、和歌山放送の社長が「同じラジオ局の仲間が困っている時は、助け合うのは当然のことだ」と言って、無料で機材を貸してくれました。これは本当に助かりました。それ以降、社長が交代しても和歌山放送とはいい関係が続いています。

もちろん、夫の理解が一番大きかったことは言うまでもありませんが、開局パーティーに駆け付けてくれた息子の一言、「ママすごい。尊敬するわ」と言われたことが一番感激しました。

●今後の夢を教えてください。

私は、世間に言いたいことが言えない放送局では存在する意味がないと考えています。良い番組を作るためには、スポンサーに頼り切った営業体質ではなく、ある程度スポンサーから独立する必要がありますと思っています。放送事業以外にもジュエリーショップ等の経営も行っているのはこの理由からです。

一般市民にとって敷居の高い放送局にはなりたくない。地域の皆さんが気楽に参加できる楽しい放送局にするのが私の夢です。



【 放送スタジオ 】

●これから起業する人たちへのメッセージをお願いします。

皆さん夢を持つことは良いことだけど、「種銭」も持たずに事業を始めてはダメです。事業を起すには一定の知識とお金が必要です。他人の禪で相撲をとるような人は成功しないと言っています。

ある程度自分のお金を投資することが必要です。

私の経営哲学は「不撓不屈」です。そしてありきたりですが、「努力、根性、忍耐」です。それを聞くとみなさんに「そんなことか」と笑われるかもしれませんが、それぐらいの覚悟をもってスタートしてちょうど良いぐらいなのです。皆さん頑張って挑戦してみてください。

<取材後記>

安政の南海地震の発生に『「これは、ただ事ではない」とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。』今も語り継がれる「稲むらの火」の冒頭部分だ。

その後、五兵衛は、稲束に火をつけることにより津波の到来を村人たちに知らせ、多くの命を救う。

その舞台となった有田地域で、今日も一人、FM ラジオを放送する坂口社長。

「自分のためではない、この地域を情報で守りたい」という強い使命感からの起業であるが、ここまでの道のりは、必ずしも順風満帆ではなかったという。

数々の苦難を使命感から生まれ出てくる勇気で乗り切る。まるで、あの五兵衛のように。

有田地域は、今日も異常なし。晴れ渡る空に、彼女の澄み渡る声が響いていた。

掲載している情報は、平成 25 年 4 月時点のものです。